

真宗総合研究所の新たな一歩 ——開所30周年に当たって——	1
2011(平成23)年度「特定研究」・「指定研究」・「資料室」研究組織一覧	2
2011(平成23)年度「指定研究」等研究目的紹介	4
2011(平成23)年度「一般研究」研究組織一覧	9
2011(平成23)年度「一般研究」研究目的紹介	11
海外研究調査報告	15
国内研究調査報告	17
共同研究及び公開研究会報告	21
研究成果報告会	23
彙報	24

真宗総合研究所の新たな一歩 ——開所30周年に当たって——

真宗総合学術センター長 藤嶽明信
真宗総合研究所長

真宗総合研究所は規程を一部改正し、2010年度から新しい研究体制を取っている。真宗総合研究所で行われる研究は「指定研究」と「一般研究」に大別される。「指定研究」は総合的に研究すべき課題を大学が指定して行われる共同研究であるが、2010年度も研究課題の整理や教員における研究時間の確保等を継続審議した。その結果、2011年度の「指定研究」は三件（国際仏教研究、西藏文献研究、真宗同朋会運動特別指定研究）に整理して行い、併せて四資料室（大谷大学史資料室、東本願寺海外布教資料室、親鸞関係文献目録資料室、デジタル・アーカイブ資料室）を開設することになった。いずれも大学として取り組むべき課題であると言えよう。

一方「一般研究」は、教員各自の研究課題や研究関心に基づいて行われる共同研究や個人研究である。「一般研究」への申請に際しては、2010年度からは科学研究費補助金への応募を前提としている。これは外部資金による研究活動を推進するために講じられたものであるが、科研への応募や採択は着実に増え、規程改正の効果が窺える。

さて、真宗総合研究所は2011年に開所30周年を迎えた。そしてその記念すべき年の4月から学長を研究代表者とする「特定研究」が開始される。「特定研究」とは、大きな分類から言えば「指定研究」に含まれるものであるが、大学として最も優先的に研究すべき重要な研究課題を特定し、学長が研究代表者となつて行われるものである。

今年度より開始される「特定研究」は、「〈建学の精神〉教育推進研究」という研究名である。これは大谷大学建学の精神を教育に具現化することを課題とするものである。そもそも大学は教育と研究の場であるが、その教育と研究が建学の精神に基づいて行われるところに私学の特徴があり、また生命線がある。もし建学の精神が閑却されるならば、私学は存

立の基盤を失ってしまうに違いない。それほど根幹的な意味を有するのが建学の精神である。そしてそうであればこそ建学の精神が教育と研究の実際においてどれほど実質性をもっているかは、常に検討されなくてはならない事柄としてある。

このたびの「特定研究」は、建学の精神を教育のなかで具体的な形として現していくことを研究課題とするものである。建学の精神は、これまでも授業（「人間学Ⅰ」「仏教と人間」等）のなかで教員各自の取り組みによって学生に伝えられてきた。そのことによって大谷大学独自の学びに強い関心を寄せる学生も少なからず生まれてきている。これらの経緯も踏まえつつ今回の「特定研究」は、大学全体を挙げた共同研究として建学の精神の具現化を推進しようとするものである。多様な学生が様々な関心をもって本学で学んでいる現状を踏まえるならば、今回改めて大学を挙げての取り組みが始まることは大きな意味がある。

大谷大学が掲げる建学の精神とは、直接には清沢満之による「開校の辞」と、佐々木月樵による「大谷大学樹立の精神」を指す。この二つの文章に関しては、30年前の真宗総合研究所開所式の挨拶のなかで、「三代学長佐々木月樵が語り、そして書き残した「大谷大学樹立の精神」こそは、大谷大学という名を課題的名称として受け止め、その内実を初代学監（学長）清沢満之の真宗大学開学の精神のもとに明らかにした大学論であると言うことができます。」（廣瀬泉学長『大谷大学広報』56-臨時号）と述べられ、大谷大学の存立の意味と使命を指し示すものであると確かめられている。

このような大谷大学建学の精神の具現化を課題とする「特定研究」が開始されることは、開所30周年に当たっての真宗総合研究所の新たな一歩として、最も相応しい事柄であると言えよう。

2011(平成23)年度「特定研究」・「指定研究」・「資料室」研究組織一覧

【特定研究】

研究名	研究課題及び研究組織
「建学の精神」 教育推進研究	<p>研究課題 大谷大学建学の精神の具現化</p> <p>研究代表者 草野 顕之(学長・教授・日本仏教史学)</p> <p>研究員 木越 康(チーフ・准教授・真宗学)</p> <p>望月 謙二(教授・国語科教育)</p> <p>渡辺 啓真(教授・倫理学)</p> <p>箕浦 暁雄(准教授・仏教学)</p> <p>富岡 量秀(講師・真宗学・幼児教育学)</p> <p>西本 祐攝(講師・真宗学)</p> <p>(他1名)</p> <p>研究補助員 (1名)</p>

【指定研究】

研究名	研究課題及び研究組織
国際仏教研究	<p>研究課題 諸外国における仏教研究の動向の把握と資料の整理・収集・公開</p> <p>研究代表者 Robert F. Rhodes(教授・仏教学)</p> <p>研究員 井上 尚実(准教授・真宗学)</p> <p>藤枝 真(准教授・哲学・宗教学)</p> <p>松浦 典弘(准教授・東洋史学)</p> <p>嘱託研究員 Michael Pye(マールブルク大学名誉教授)</p> <p>Mark L. Blum(ニューヨーク州立大学教授)</p> <p>Paul Watt(デポー大学教授)</p> <p>羽田 信生(毎田周一センター所長)</p> <p>Michael J. Conway(本学非常勤講師)</p> <p>研究補助員 斉藤 覚(博士後期課程第3学年)</p> <p>王 奕明(博士後期課程第3学年)</p>
西藏文献研究	<p>研究課題 チベット語文献及びバリー語言葉写本のデータベース化</p> <p>研究代表者 兵藤 一夫(教授・仏教学)</p> <p>研究員 福田 洋一(教授・仏教学)</p> <p>山本 和彦(准教授・仏教学)</p> <p>嘱託研究員 白館 戒雲(本学名誉教授・特別研究員)</p> <p>清水 洋平(本学、名古屋大学非常勤講師・特別研究員)</p> <p>宮本 浩尊(本学非常勤講師)</p> <p>研究補助員 渡邊 温子(博士後期課程第3学年)</p> <p>永藁 知也(博士後期課程第2学年)</p>
真宗同朋会運動研究 (和田稔氏の寄付金による特別研究)	<p>研究課題 真宗同朋会運動の歴史と現状を「聞き書き」を通して把握し、その現代的意義を明らかにする</p> <p>研究代表者 水島 見一(教授・真宗学)</p> <p>佐賀枝 夏文(教授・社会福祉学)</p> <p>富岡 量秀(講師・真宗学・幼児教育学)</p> <p>研究補助員 佐々木 秀英(博士後期課程満期退学)</p> <p>安居 宏淳(博士後期課程第3学年)</p>

【資料室】

研究名	研究課題及び研究組織	
大谷大学史 資料室	研究課題 室長 嘱託研究員 研究補助員	大学史関係資料の収集・整理 采 翠 晃 (研究所主事・准教授・仏教学) 戸 次 顕 彰 (本学非常勤講師) 稲 葉 維 摩 (博士後期課程第2学年)
東本願寺海外 布教資料室	研究課題 室長 研究補助員	大谷大学図書館所蔵「東本願寺旧蔵資料」海外布教関係 部分の整理 桂 華 淳 祥 (教授・東洋史学) 濱 野 亮 介 (博士後期課程第3学年)
親鸞関係文献 目録資料室	研究課題 室長 研究員 研究補助員	親鸞関係文献のデータの整理と公開の研究 山 野 俊 郎 (教授・仏教学) 山 田 恵 文 (講師・真宗学) 大 艸 啓 (博士後期課程満期退学)
デジタル・アーカイブ資料室	研究課題 室長	大谷大学所蔵貴重資料のデジタル・アーカイブの構築 采 翠 晃 (研究所主事・准教授・仏教学)

2011(平成23)年度「指定研究」等研究目的紹介

「建学の精神」教育推進研究

大谷大学建学の精神の具現化

研究代表者・学長 草野 顕之
(日本仏教史学)

本研究は、「建学の精神の具現化」を課題とし、これについて具体的には以下の3つの視点から研究を推進するものである。

- ①「建学の精神」の現代的表現化
- ②「人間学Ⅰ」の共通資料集の作成
- ③「建学の精神」を活かした学科教育の在り方

ここに言う「建学の精神」とは、直接には大谷大学初代学長清沢満之による「開校の辞」(明治34年、移転開校式)と、第3代学長佐々木月樵による「大谷大学樹立の精神」(大正14年、入学者宣誓式訓辞)を指す。

研究の視点①では、本学が今日まで教育の根幹に据えてきた両学長の訓辞の意義を再確認し、これを現代的形で表現していくことを目指す。両訓辞は、それぞれ「私立学校令」(明治32年公布)と「大学令」(大正7年公布)における宗教教育に対する厳しい制約のもとで公開されたものである。ここでは、そのような当時の歴史的状況を加味したうえで両訓辞の持つ意義を再検証し、その精神が持つ現代的意義の確認と表現を含めた具現化の問題について、検討していくことが期待される。

視点②では、本学の「建学の精神」に基づく教育を最も体現する科目である「人間学Ⅰ」(文学部)あるいは「仏教と人間Ⅰ」(短期大学部)に関して、教育の基礎となる共通資料の作成に向けた検討を進める。現在同科目は、主に真宗学または仏教学を専門とする専任の教員によって、「仏教と現代」(短期大学部では「仏教と人間」の科目名)という共通テーマのもとで行われている。しかし、授業内容や到達目標などに関しては統一がとれておらず、大学共通科目としての教育の質は、担当教員の工夫と裁量に依存した形で行われている。本研究では、これまでの「人間学Ⅰ」教育の歴史を十分に踏まえたうえで、いかにして「建学の精神」を体現する科目として、教育内容を共通化できるかを、共

通資料の作成を通して具体的に検討していくこととする。

視点③では、以上の①および②での成果を踏まえ、大谷大学の建学の精神と各学科における教育との連関について検討作業をおこなうことを目指す。現在本学では、文学部9学科、短期大学部2学科で、それぞれのカリキュラム理念を掲げた教育を行っている。今後ますます学科ごとのポリシーの明確化が進む中で、いかにして「建学の精神」との関連を保ちつつ専門教育を行うことができるのか、十分な検討が必要とされる。ここでは、各学科の教育理念を念頭に置きながら、建学の精神をどのような形で反映させることができるのか、検討を進めるものとする。

国際仏教研究

諸外国における仏教研究の動向の把握と資料の整理・収集・公開

研究代表者・教授 ロバート F. ローズ
(仏教学)

従来は英語圏を中心として研究活動を行ってきたが、近年はヨーロッパや中国など、他の言語文化圏へも活動の範囲を拡大している。本年も〈英米班〉〈ドイツ・フランス班〉〈東アジア班〉がそれぞれの言語文化圏を担当し、以下のような具体的研究テーマ・目的にそって研究を進める。

〈英米班〉

- ①真宗・仏教関係の国際学会の年次大会参加

国際真宗学会第15回学術大会(8.4~6於大谷大学、大谷大学パネル発表)、ヨーロッパ日本学会第13回国際会議(8.24~27 タリン大学、エストニア、大谷大学パネル発表)、アメリカ宗教学会(11.19~21サンフランシスコ)、アジア学会(2012.3.15~18 トロント)などに研究員を派遣し、研究発表、情報収集、研究交流を行う。

②真宗近代教学アンソロジーの英訳 *Cultivating Spirituality: A Modern Shin Buddhist Anthology* については昨年度で作業を終え、今年度の早い時期にニューヨーク州立大学出版(SUNY)から発行される。この出版を契機に国際シンポジウムを開くことを検討する。

③佐々木月樵「大谷大学樹立の精神」翻訳研究

2009年度から始まった翻訳プロジェクト、佐々木月樵の「大谷大学樹立の精神」の英訳出版について、今年度も月1回程度の研究会を継続し、年度末には成果を公にできるようにする。

④公開講演会の開催

学術交流の促進を図るため、国内国外で活躍している真宗学・仏教学関係の学者を招聘し、公開講演会を4回程度開催する。第1回は前期の6月初めにエトヴェシ・ロラント大学のコサ・ガボール教授による講演を予定。その他の講師については現在交渉中。

⑤仏教関係の洋書・学会誌のデータベース公開

英語班が収集してきた英文資料の整理を行い、図書館と協力して利用し易い形に改め、データベースを公開する。

⑥国際仏教研究のホームページについては、研究所のサイト内に立ち上げられるかどうか検討する。所報以外のメディアでも公開講演会・海外学会参加報告等の情報を公開できるように努力する。

〈ドイツ・フランス班〉

〈研究テーマ〉

仏教・他宗教比較研究

- ①「プロテスタント神学との対話」
- ②「日本における近代化された宗教に関する宗教史的・社会学的観点からの研究」

〈研究の目的〉

①「プロテスタント神学との対話」

浄土真宗とプロテスタント神学との対話・比較研究を継続していく。具体的な研究として、2011年5月11日(水)～16日(月)にマールブルク大学で開催される「第7回ルドルフ・オットー・シンポジウム」に村山保史(本学准教授・在外研究中)氏が参加し、口頭発表をすることが計画されている。

このシンポジウムは「性の平等について—諸宗教の挑戦—」という全体タイトルの下で、ドイツ国内はもとより、世界各地からの参加者が集う国際シンポジウムである。村山氏は「東アジア仏教伝統における神的なもの象徴化に含まれるジェンダー的要素」というタイトルで発表する。

②「日本における近代化された宗教に関する宗教史的・社会学的観点からの研究」

フランス国立高等研究院(EPHE)の宗教社会学部門との交流を継続していく。具体的な研究として、2010年5月5、6日に、“National Identities and Religion: A French-Japanese Comparative Approach”というテーマのもとで開催されたシンポジウム(於 EPHE)の口頭発表をもと

に、口頭発表者(ロバート・F・ローズ、井上尚実、村山保史、飯田剛史、藤枝真、番場寛)が発表原稿を論文文化し公刊する。EPHEのフィリップ・ポルティエ教授の協力を得て、フランス語での出版が予定されている。

〈東アジア班〉

〈研究テーマ〉

中国華北・東北・東部モンゴル地域の宗教と文化の研究
〈研究目的〉

中国華北地域、東北地域(いわゆる満洲)、東部モンゴル地域(内モンゴル自治区東部)における宗教及び関連文化の諸相を、歴史史料によって再構成し、さらに現地調査によって明らかにしていく。

〈研究方法〉

本学と中国・東北師範大学(吉林省长春市)との学術提携ならびに中国社会科学院歴史研究所(北京市)との学術協定に基づき、双方の研究者が往来して本テーマに関わる共同研究会を実施する。また、現地関係者の協力を得て当該地域に存する仏教遺跡あるいは近時急速に復興しつつある仏教寺院など宗教施設の探訪調査を行う。

〈研究計画〉

共同研究「中国華北・東北・東部モンゴル地域の宗教と文化」の推進

- 1) 前記研究機関より研究者を招聘し、共同研究ならびに公開研究会を開催する。
- 2) 東部モンゴル地域及び華北・東北地域における仏教文化の諸相について、現地調査を行う。

西藏文献研究

チベット語文献及びパーリ語
貝葉写本のデータベース化

研究代表者・教授 兵藤 一夫
(仏教学)

大谷大学は北京版チベット大藏経や貴重な蔵外文献など多数のチベット語文献、タイ王室寄贈の多数のパーリ語貝葉写本を所蔵している。これらは、本学はもとより国内外のチベット研究やパーリ仏教研究のための重要な資料となっている。本研究は、これら本学所蔵の重要な文献資料を、とりわけ近年収集されたものを

含めて、専門の研究者が十分に活用できるように整理し、データベース化する。また、文献や写本のなかで重要あるいは貴重と思われるものについては電子テキスト化やデジタル画像化して公開する。

上記の目的を達成するために、2011年度は以下の研究を行う予定である。

1 貴重なチベット語文献の電子テキスト化

本学所蔵の稀観書ツァンナクパ著『量決訳註』の電子テキスト化を進め、科文とダルマキールティの『量決訳』偈および自註も加えた校訂テキストを作成し、公開する。さらに、ネット上での公開に加え、冊子体での出版を検討する。また、本学所蔵の木版本を底本として既に入力済みの『ミラレーパの十万歌』の電子テキストに、テンギュエリン版および青海民族出版社本の異同を調査して校訂したテキストを作成して公開する。

2 大谷大学図書館所蔵チベット語文献データベース

2010年度の調査に基づいて修正した図書館所蔵データの提供を受け、それを基に研究者向けのデータベースを作成する。さらに、TBRCのチベット語文献PDFコア・コレクションの学内での利用促進のために大蔵経などの使い易いデータベースを作成する。

3 パリ語貝葉写本の中で、貴重なものや学界から要請のあるものから順にデジタル画像化を進める。この作業は2010年度のDB研究の継続である。さらに、本学所蔵のパリ語貝葉写本の中で、稀観文献と考えられるテキストと同じ内容と思われるテキストが海外の寺院や研究機関で保存されていることが数点確認されている。これらの作業の一環として2011年度は、フランス極東学院(EFEO)名誉講師ジャクリン・フィリオザ女史の協力のもと、パリ所在のEFEOとタイ・バンコク所在の寺院において写本の同定作業を進める。

4 海外の研究者との交流を行い、適宜に研究会等を開催する。

■研究目的

本研究は、真宗と社会との関わりを主題とし、具体的には真宗同朋会運動における求道と獲信に学ぶものである。同朋会運動は、本来、地域に根ざした草の根運動である。したがって、本研究は、一人ひとりにおける「群萌の目覚め」に視点を置き、特に、求道の道程に焦点をあてて、一人ひとりの宗教的人格に触れることを通して、真宗同朋会運動の意義を明らかにすることを目的とする。

また、信仰が生み出す社会性、および人々の精神性に与えた影響なども調査を通して把握し、真宗同朋会運動の現状や社会的・現代的意義を明らかにしていきたい。

以上のことから、本年度は全体を理論編と調査編の二部構成として組み立て、以下の事を具体的に進める。

- ①理論編：本研究の基礎研究であり、同朋会の歴史と社会的背景、同朋会運動への教団の施策、同朋会運動の中心人物に関する資料を収集し、整理していく。2009、2010年度は基本資料の整理と分析、また学外研究者による公開研究会を行い、多角的な同朋会運動への確かめを行った。2011年度も引き続き理論編の構築を進め、まとめていく。
- ②調査編：本研究の中心であり、門信徒の方々に「聞き書き」という調査手法を用いた調査を展開する。そのことを通して、宗教的人格を具体的に明らかにしていく。2009、2010年度に実施した調査の整理・分析し、まとめていく。
- ③出版：本年度は、研究成果の出版に向けて具体的に進めていく。

■研究方法

上記の研究目的を遂行するために、本年度は理論編と調査編の研究成果をまとめ、出版に向けて研究を進めていく。

- 理論編：○年表の作成
- 1) 真宗大谷派の視点から：宗報『真宗』の関係記事を精査し、整理していく。
 - 2) 通史の視点から：『文化時報』、『中外日報』の関係記事を精査し、整理していく。

○同朋会運動と宗門内組織との関係構造の把握

真宗同朋会運動研究

真宗同朋会運動の歴史と現状を「聞き書き」を通して把握し、その現代的意義を明らかにする

研究代表者・教授 水島 見一
(真宗学)

- 1) 真宗大谷派宗務所へヒアリング調査
- 2) 宗報『真宗』の関係記事の精査

○同朋会運動の運動史の整理

- 1) エピソード抽出(人物中心)
- 2) エピソード抽出(事象中心)
- 3) 思想の把握と整理

調査編：2011年度は、現在までの調査成果を整理・分析し、同朋会運動の意義を明らかにしていく。

○聞き取りをした方々のエピソードを分析し、同朋会運動の展開における位置づけを把握。

○学外研究者の視点の整理と、それによる同朋会運動の点検から意義を明確化。

○「聞き書き」調査の分析。

出版：現在、出版社と協議し進めている。

大谷大学史資料室

大学史関係資料の収集・整理

室長・准教授 采罽 晃
(仏教学)

真宗総合研究所設立当初より「真宗学事研究班」「大学史編纂研究班」「大谷大学史研究班」などと、幾度にもわたる組織改編を経て、現在の「大谷大学史資料室」となっている。本資料室が担うのは、大谷大学の大学史を彩ってきた様々な資料を、収集、整理、保存した上で、それらを公開して活用資するという任務である。これまでの成果として、『大谷大学近代一〇〇年のあゆみ』・『大谷大学百年史』・『清沢満之全集』・『臘扇記[注釈]』・『真宗学事年表』などを刊行してきた。

大学が自らの出自を明らかにすることは、その存在意義を明確にする上で避けては通れない、重要な意義を持っている。このことは、大谷大学のみならず多くの大学においても言えることである。99機関が加盟する「全国大学史資料協議会」(<http://www.universityarchives.jp/>)への参加は、志を同じくする様々な機関との連携やノウハウの共有などといった効果が期待される。

また、上述のような少なからぬ成果の刊行によって、既にある程度の収集・整理はなされてきたものの、依然として十分な整理ができていない資料がある。これらを適切に評価し整理した上で、少しずつでも公開できるようにしていく。

その第一歩として、図書館の入り口付近に大学史資料展示のための展示ケースを借り受けることができた。このスペースを活用して、これまでの蓄積を公開していきたい。また、このささやかな展示によって、多くの関係者の関心を喚起することも意図している。

東本願寺海外布教資料室

大谷大学図書館所蔵「東本願寺旧蔵資料」海外布教関係部分の整理

室長・教授 桂華 淳祥
(東洋史学)

大谷大学図書館所蔵「東本願寺旧蔵資料」に含まれる海外布教関係部分は、おもに20世紀前半における東本願寺の海外布教に関する公文書の綴りで、当時の海外布教の実態を伝える貴重な資料である。しかしそれは事務書類綴りのまま未整理の状態で残されているもので、その内容はもとより点数すら正確には把握されていない。したがってこの状態が続けばその存在も知られず、あるいは散逸の恐れもある。

本資料室の目的は、これら未整理の資料を整理して「資料一覧」を作成するとともに、資料自体を適正な形態にまとめて保存することにある。これによって本資料の半永久的な保存が可能になり、今後、当該時代の東本願寺の活動をはじめとする様々な分野の研究に寄与することが期待される。

本資料の整理は、昨年度まで真宗総合研究所の指定研究「国際仏教研究(中国班)」の活動の一環として行われてきていたが、それが急務であることから専従の組織として本資料室を置くこととなった。したがって整理・保存の手順も、作業をより円滑にするため若干の修正は加えるものの、基本的には従来のそれを踏襲して進めていく。具体的な方法は下記の通り。

- ①事務書類綴りの状態になっている資料について内容を確認し、必要事項をカードに記録する。
- ②内容を記録したカードにしたがって「資料一覧」を

作成する。

③内容を確認した資料を適正な形態にまとめて保存可能な状態にする。

資料にはおおよそ書類1綴りを1点として仮番号を付して、総べて165。昨年度は20番台を整理中であつた。資料1点内の書類の件数には多寡があるので仮番号での具体的な数字は示しにくい、本年度は全体の三分の一程度が整理出来ると見込んでいる。

親鸞関係文献目録資料室

親鸞関係文献のデータの整理と公開の研究

室長・教授 山野 俊郎
(仏教学)

本年、親鸞聖人750回御遠忌を迎えた。真宗総合研究所では、昨年度まで御遠忌に向けて「大谷大学親鸞聖人750回御遠忌記念特別指定研究」として「親鸞像の再構築」班を設け、様々なプロジェクトを展開し、研究成果を公表してきたことである。本資料室は、そのプロジェクトの一つである「文献目録の作成」という事業を継承し、今年度発足したものである。

「文献目録の作成」とは、親鸞関係の文献を対象として、データを収集し、公開することを目的とした事業である。特に前回の御遠忌(1961)から今年度の750回御遠忌までの50年間において刊行された親鸞関係の文献を対象としている。これらの文献データを収集し整理することは、過去50年間にわたる親鸞研究を概観することにおいて有効であると考えられる。よって、本資料室においては、親鸞に関心を寄せる研究者が活用できるように、親鸞関係の文献のデータベースを構築し、web上で公開することを目指す。

すでに、『親鸞大系』別巻(法蔵館)所収の文献目録と『仏教書総目録』No.1~No.28(仏教書総目録刊行会)を活用し、データの収集を行ってきた。『親鸞大系』所収の文献目録からは、1961年から1982年までに発刊された単行本を抽出し、また1983年から2011年までに発刊(または発刊予定)の単行本は、『仏教書総目録』を用いてデータの入力作業を継続的に遂行してきた。

今年度は、これらの入力されたデータの点検と見直しの作業を行うとともに、上記の目録に収録されてい

ない単行本を、他の情報により補完していきたい。また、全集・叢書については、中断していた入力作業を再開するとともに、単行本のデータベース上に合わせて開示する手法を検討していく予定である。

以上の作業を受けて、web上での最適な公開方法を検討し、整理したデータを公開することを目的とする。

デジタル・アーカイブ資料室

大谷大学所蔵貴重資料のデジタル・アーカイブの構築

室長・准教授 采翠 晃
(仏教学)

コンピューターとネットワークの発達によって、現在ではデジタル・データ化された資料が多く求められるようになってきた。

本学は多くの貴重な資料を所蔵しているが、それらの多くはじかに現物に接しない限りは利用できない状況になっている。この状況は、利用促進の側面からはいうまでも無く、資料保存の側面からも決して望ましいものではない。

また、多くの学内学会を有する大谷大学では、様々な学術刊行物が発行されているが、それらの利用もいまだ決して十分とは言えない。

これらのものをデジタルデータとして保存し、また積極的に公開していくことで、大谷大学の学術研究データベース・リポジトリの構築を企図する。これは、大谷大学の学術情報社会におけるプレゼンスを高めることにも資するであろう。

上記のような目論見のもと、図書館所蔵古典籍のデータベース構築貴重資料のデジタルデータ化を進めるとともに、その公開システムの構築にも取り組む。

2011(平成23)年度「一般研究」研究組織一覧

【共同研究】

研究名等	研究課題及び研究組織
【2010～2012年度科研採択】 一般研究（渡部班）	研究課題 元朝期～明朝初期の言語接触に関する文献学的研究 研究代表者 渡部 洋（准教授・中国語・近世の中国語文法） 研究員 松川 節（教授・東洋史学・人文情報学） 協同研究員 小野 浩（京都橘大学教授） 古松 崇志（京都大学人文科学研究所助教） 石野 一晴（千里金蘭大学非常勤講師） 毛利 英介（神戸女子大学非常勤講師） 研究協力員 伴 真一朗（博士後期課程修了）
【2010～2012年度科研採択】 一般研究（池上班）	研究課題 日本における西洋哲学の初期受容 一清沢満之の東京大学時代未公開ノートの調査・分析― 研究代表者 池上 哲司（教授・倫理学） 研究員 加来 雄之（教授・真宗学） 門脇 健（教授・宗教学） 朴 一功（教授・西洋古代哲学） 村山 保史（准教授・西洋哲学） 協同研究員 藤田 正勝（京都大学大学院教授） 竹花 洋佑（本学非常勤講師） 西尾 浩二（本学非常勤講師） 研究協力員 竹中 正太郎（博士後期課程満期退学）
【2009～2011年度科研採択】 一般研究（松川班）	研究課題 世界遺産エルデニゾー僧院に関する総合的研究―過去の復元から未来への保存へ― 研究代表者 松川 節（教授・東洋史学・人文情報学） 研究員 三宅 伸一郎（講師・チベット学）
【予備研究】 一般研究（乾班）	研究課題 皎然の禅体験と詩作 研究代表者 乾 源俊（教授・中国文学） 研究員 佐藤 義寛（教授・中国文学） 協同研究員 愛甲 弘志（京都女子大学教授） 浅見 洋二（大阪大学大学院教授） 川合 康三（京都大学大学院教授） 齋藤 茂（大阪市立大学大学院教授） 谷口 匡（京都教育大学教授） 緑川 英樹（京都大学大学院准教授） 湯浅 陽子（三重大学准教授） 大角 紘一（任期制助教） 永田 知之（京都大学人文科学研究所助教） 研究協力員 谷口 高志（大阪大学大学院助教）
【予備研究】 一般研究（大内班）	研究課題 道宣著作の研究 研究代表者 大内 文雄（教授・東洋史学） 研究員 松浦 典弘（准教授・東洋史学） 協同研究員 藤井 政彦（本学非常勤講師） 戸次 顕彰（本学非常勤講師） 研究協力員 松岡 智美（博士後期課程第3学年） 河邊 啓法（博士後期課程第2学年）

研究名等	研究課題及び研究組織
【予備研究】 一般研究（高山班）	研究課題 小学校の教育実践にみられる子どもの変容の分析と考察 研究代表者 高山 芳 治（教授・社会科教育学） 研究員 岩 渕 信 明（教授・社会科教育学） 望 月 謙 二（教授・国語科教育学） 関 口 敏 美（教授・教育学・教育史） 市 川 郁 子（講師・音楽科教育学） 協同研究員 大 野 僚（本学非常勤講師）
【予備研究】 一般研究（延塚班）	研究課題 『教行信証』の思想研究－近代教学の成果を踏まえて－ 研究代表者 延 塚 知 道（教授・真宗学） 研究員 山 田 恵 文（講師・真宗学）

【個人研究】

研究名等	研究課題及び研究組織
【2011～2014年度科研採択】 一般研究（ダシュ班）	研究課題 日本で発見されたオリヤー語『マハーバーラタ』「津島貝葉」の校訂テキスト作成 研究代表者 ダシュ ショバ ラニ（講師・仏教学）
【2011～2012年度科研採択】 一般研究（右田班）	研究課題 天皇家の商品化過程にかんする歴史社会学的研究 研究代表者 右 田 裕 規（任期制助教・社会学・特別研究員）
【2011～2012年度科研採択】 一般研究（西尾班）	研究課題 プラトンの中期イデア論の生成 研究代表者 西 尾 浩 二（本学非常勤講師・特別研究員）
【2011～2013年度科研採択】 一般研究（箕浦班）	研究課題 本地物語の研究—菩薩行と誓願を視座として— 研究代表者 箕 浦 尚 美（本学非常勤講師・特別研究員）
【2010～2013年度科研採択】 一般研究（阿部班）	研究課題 変動期の社会における法秩序の再構築—南アフリカとカンボジアの比較社会学的研究 研究代表者 阿 部 利 洋（准教授・社会学）
【2010～2013年度科研採択】 一般研究（飯田班）	研究課題 民族文化祭の比較研究 研究代表者 飯 田 剛 史（教授・社会学）
【2010～2012年度科研採択】 一般研究（古川班）	研究課題 世界史における東アジアとアフリカ—国際共同研究のための基盤形成— 研究代表者 古 川 哲 史（准教授・歴史学／比較文化・社会論）
【2009～2011年度科研採択】 一般研究（白館班）	研究課題 チベット仏教における論理学の研究 研究代表者 白 館 戒 雲（本学名誉教授・特別研究員）
【2009～2011年度科研採択】 一般研究（脇中班）	研究課題 高次脳機能障害者とその家族のピアサポートによる自己と関係の変容に関する発達の研究 研究代表者 脇 中 洋（教授・発達心理学・法心理学）
【2010～2011年度科研採択】 一般研究（朴班）	研究課題 フレデリック・ダグラス晩年のマスキュリニティ言説とアメリカ社会における人種表象 研究代表者 朴 珣 英（本学非常勤講師・特別研究員）
【2010～2011年度科研採択】 一般研究（西川班）	研究課題 貧困に対する活動と社会的レジリエンスの社会学的研究—シカゴ学派からの展開と実践 研究代表者 西 川 知 亨（任期制講師・社会学）
【2010～2011年度科研採択】 一般研究（清水班）	研究課題 タイ国中部地域の王室寺院が所蔵する東南アジア撰述仏教説話写本の研究 研究代表者 清 水 洋 平（本学、名古屋大学非常勤講師・特別研究員）
【予備研究】 一般研究（福田班）	研究課題 ツォンカパ中観思想の基礎的研究 研究代表者 福 田 洋 一（教授・仏教学）
【予備研究】 一般研究（山本班）	研究課題 アメリカの公共図書館における専門職制度の総合的研究:専門職と非専門職の枠組み 研究代表者 山 本 貴 子（准教授・図書館情報学）
【予備研究】 一般研究（高橋班）	研究課題 多感覚表象形成メカニズムの進化・発達の分析 研究代表者 高 橋 真（任期制講師・比較認知科学）

2011(平成23)年度「一般研究」研究目的紹介

共同研究

皎然の禅体験と詩作

研究代表者・教授 乾 源俊
(中国文学)

詩は体験であり、禅も体験であると言いうる。詩は六朝以来、世界の見え方について、さまざまな探求とそれを言語化する試みを重ねてきた。皎然の場合、ふつう考えられるように、禅体験のそのままの過程が詩において再現される、というわけではない。そうではなくて、詩がさまざまに工夫を重ねてきた風景描写の仕方のなかに、みずからの体験を「紛れこませる」ようにして、それは目論まれているのではないか。そうであるならば、宗教体験の表出ということはいったん棚上げにしたうえで、まず叙景とそれともなう叙情の、特異な関係の問題として、風景詩の文脈において考えることがより重要であろう。禅家の言う「開悟」体験については、皎然の詩の言語使用をとおした、その向こう側にあるものとして想定することが、さしあたり必要ではないか。こうした観点から、皎然詩の文学史上における正しい位置づけをはかりたい。とりわけ、風景描写のなかにあらわれる禅体験について、しかるべき評価をなすこと、及びどのように評価しうるのであるかという、評価の視点を確立し、学会の標準となるような研究基盤を構築したいと考えている。

皎然詩の風景描写に見える禅体験の究明をめざし、さしあたって目的とするのは、皎然における詩と禅の体験についての概観を得ること、その輪郭を描くことである。それは地道な読解の作業と不可分のものである。皎然詩の注釈はこれまでのところ皆無であり、典故や用例の調査など読解の基礎作業をほどこしたうえで、課題について議論を重ねるしかない。難しいのは、詩の体験がその場かぎりで一瞬にして消えてしまうことである。体験そのものを記述することは至難であり、読みの過程を書きとめたとしても、何らかの形骸をとどめることができるにすぎない。しかしその体験を繰り返し記述する作業をとおして、あるいは記述しようとする行為そのもののなかに、目的とする課題の達成は

あらわれる、とも言いうる。こうした研究の方策の模索と確立が、もうひとつの目的である。

本研究は、究極の目的としては、六朝から唐代にいたる精神史の探求ということになろう。詩はその重要な媒体でありうる。しかしその場合にも、上述のような前提のもとに、ということである。本研究は、精神史としての中国詩史という観点のもとに、文学の分野だけでなく、時をおなじくして展開してきた禅思想の研究にも寄与しうらうだろう。

共同研究

道宣著作の研究

研究代表者・教授 大内 文雄
(中国仏教史学)

唐・道宣(596-667)は、中国仏教史上の巨人と言ってよい。またその著作は、広く東アジアの漢字・漢訳仏教文化圏において、現在に至るまで大きな影響を与え続けている。しかし、道宣その人の生涯と事績を、専門的研究の対象とすることは、その影響力の大きさに反比例するように、これまでほとんど無く、今世紀に入り、藤善真澄氏によって『道宣伝の研究』(京都大学学術出版会 2002年)が著わされ、ここに大きな画期がなされた。しかし、道宣がものした著作の総合的研究はいまだなされていないのが現状である。本研究は、上記の藤善真澄氏の研究成果を基礎として、道宣の著作そのものの総合的理解を図り、道宣その人の思想と、彼を取り巻く時代と社会、及び仏教の実態把握を企図するものである。

道宣の著作は、およそ次の、(1)戒律類、(2)經典目錄類、(3)史伝類、(4)護法類、の四種に分類される。現在、(1)戒律に関しては、主著の『四分律刪繁補闕行事鈔』や『四分律含注戒本疏』等20部が数えられ、これらが道宣著作の枢要部分であり、その著述期間はごく初期から最晩年に至るほぼ全生涯にわたる。(2)經典目錄類は、『大唐内典録』10巻の一部のみであるが、後世の入藏録に与えた影響には大きいものがあり、また彼の歴史観を知る史料である。(3)史伝類では、『続高僧伝』30巻や

『釈迦氏譜』『集神州三寶感通録』『律相感通伝』（『道宣律師感通録』）の四部があり、(4)護法類・三教論争関係では『広弘明集』30巻、『集古今仏道論衡』4巻がある。

道宣の著作は多岐にわたるが、また彼の文章は難解をもって鳴ることを定評とする。研究者の道宣の著作に対する利用姿勢は、往々にして分野別に且つ単一の史料として個別に扱うに止まり、従ってその著作全体を研究対象として取り上げる研究はこれまで皆無である。その理由は、一にかかってその歴大且つ難解な文献の量と質にあるのであって、これからも研究上の障壁として存在し続けるであろう。本研究の目的を達成するための具体的方途を述べれば、著者道宣の自序及び篇序等の文章を蒐集して研究の対象とし、これらの書誌的調査をおこない、同時に解読作業、及び各文章の典拠調査を綿密に実施する。本研究は、これらの多分に困難をきわめるであろう注解作業を通して、道宣著作の相互関係の把握と、それによる道宣の思想・特性の全体像の理解がもたらされ、ひいては道宣著作の総合的研究の端緒となることを期すものである。

共同研究

小学校の教育実践にみられる 子どもの変容の分析と考察

研究代表者・教授 高山 芳治
(社会科教育学)

本研究では、新学習指導要領の下で、子どもたちに「生きる力」が育成されているかどうかを検証するために、①「基礎・基本的な知識・技能」(＝基礎学力)、②「思考力・判断力・表現力」(＝応用的学力)、③「言語活動」を軸として、教育実践を調査・分析することを目的とする。特に、「言語活動」の土台が形成される小学校段階に対象をしほり、子どもの変容・学力形成に注目し、基礎学力がどのようにして「生きる力」の育成に結びつくのか、基礎学力を保障しながらどのようにして個性を伸ばすことが可能であるのかを考察する。

そこで、第一に、小学校における教育活動の実態をフィールド調査し、第二に、新学習指導要領の下での教育活動に予想される問題点を考察するために、フィールド調査の結果を原理的・歴史的に分析し、第三に、研究協力校との研究交流を通して、一斉学習か、他の方

法(個別学習、グループ学習)か、子どもの学力形成に有効な方法を探り、現在の教育実践に対する提案を試みる。その際、京都市立小学校3校にて実態調査を行うが、協力校との連携を密にするために共同研究会を設定することで、本研究の具体的な方策を協力校との交流関係のなかで構築し、研究会を基盤とした研究の方向性を探る予備研究を実施する。また比較対照のため、京都市以外の小学校や独自の教育実践を継続している私立学校などを見学する予定である。

さらに、原理的・歴史的な観点からも新学習指導要領を検討しながら、フィールド調査の結果にフィードバックさせることで多角的に分析し、新学習指導要領の提示する目的と方法の妥当性の吟味および予想される問題点の指摘も可能な範囲で行う。例えば、戦後初期社会科の失敗は、その後、生活科や総合的な学習の導入が試みられるたびに同様の失敗を繰り返しがちであった。それゆえ過去の教育実践史の見直しを視野に入れた原理的・歴史的な観点からの分析により多角的な分析が可能となる。

一人一人に「生きる力」に結びつく基礎学力および応用的学力を育成するには、現在の一斉学習を基本とする教育方法では限界がある。「言語活動」の充実をめざす場合、言語能力には個人差があるため、個別学習やグループ学習などを適宜組み合わせる必要がある。本研究では、基礎学力を保障しながら、いかにして個性や能力を伸ばすか、個別的な指導ができるかを探究し、適切な教育方法を教育現場に提言することもめざしている。

共同研究

『教行信証』の思想研究 —近代教学の成果を踏まえて—

研究代表者・教授 延塚 知道
(真宗学)

本研究は、親鸞の著『教行信証』の詳細な解読と、それによる親鸞の仏道(浄土真宗)の思想研究が目的であり、最終的にはこれからの『教行信証』研究に資するため、著書として出版することを目指している。

現在までの『教行信証』研究の歴史は、大きく分けて二つの伝統がある。ひとつは、江戸期のいわゆる宗学とし

での研究で、その成果は講録として残っている。もうひとつは、清沢満之に始まるいわゆる近代教学の伝統である。それは曾我量深・金子大栄を初めとする諸先輩の著作として残っている。

現在、『教行信証』研究のほとんどが、香月院深励などの江戸の講録と山辺習学、赤沼智善両師の『教行信証講義』に基づくものである。山辺・赤沼の『教行信証講義』も発表の時期が早すぎたために、曾我量深に始まった『教行信証』の近代の思想研究の成果を踏まえるには至っていない。だからその内容は、講録をわかりやすい現代的な言葉で表現し直したものである。両師は清沢満之の門下であり、満之が大切にされた実験や宗教体験を強調しながら『教行信証』の講義を進めている。しかし、宗教体験の深い道理を教学として表現するというよりも感情面で訴えることが多く、いまだ教学として十分に表現されているわけではない。『教行信証』の本格的な思想研究は曾我量深に始まるのであるが、その成果を踏まえなければ『教行信証』は読めないのではなからうか。江戸の講録に依るのではなく、近代教学の成果に立って『教行信証』を読み直す時期にきていると思われる。

また、『教行信証』は、法然の『選択本願念仏集』の真実義を明らかにせんとする書物である。その際、どうしても視野に入れなければならなかったのは、明恵の『摧邪輪』である。親鸞の『教行信証』の方法論や全体の構成は、明恵の『摧邪輪』に丁寧に応えようとしたものである。しかし、これまでの『教行信証』研究は驚くほど、このことに触れられていない。それは、江戸時代に香月院が、「広文類一部が彼(明恵)の破を会通すると云う様なる小さい事ではない。一天無二の真宗興隆の御撰述なり。」「(『教行信証講義集成』第六卷三六九頁)」と論じたことによって、親鸞研究から『摧邪輪』を落としたのだと思われる。しかし、『摧邪輪』をよく読むと、『教行信証』の課題、その構成、方法論等、なぜ親鸞がそうしたのかということがよく分かる。

したがって本研究は、近代教学の成果と、『摧邪輪』の影響とを踏まえながらこれまでになかった『教行信証』研究にしたいと思っている。

個人研究

ツォンカパ中観思想の基礎的研究

研究代表者・教授 福田 洋一
(仏教学)

本研究の目的は、チベットを代表する仏教哲学者であるツォンカパ・ロサンタクパ(1357-1419)の中観哲学の正しい理解を得るために、その主要な中観関係の著作の、できる限り正確な和訳と注解を提供することにある。ツォンカパの全哲学体系は、中観思想の空の理解を基礎にしている。しかし、それを表現するツォンカパの文章は難解であり、それを理解するためには正確な文法的理解、議論の文脈の理解、チベット人による伝統的な解釈の知識などが必要である。それと同時に、それによって得られた解釈を適切な日本語で表現する努力も要求される。これまでも優れた和訳は存在し、出典などの文献的な調査は十分に行われてきたが、上の諸点に基づく理解とその表現という点では、新たな翻訳の試みを行う余地があると思われる。本研究においては、チベット語と対照させても、また独立に読んでも理解できる訳文と、論理の展開を説明する注記を作成し、今後のツォンカパ中観思想研究の基盤を固めたいと思う。

本予備研究で対象とするテキストは、ツォンカパの中観思想を述べた独立の著作のうち、もっとも大部な『ラムリム大論』の毘鉢舍那章を除く、『善説心髓』の中観章と『ラムリム小論』の中観章とである。文献学的な注記よりも、文法的な理解とコンテキストの読解の正確さ、それらを的確に反映した日本語の訳文と、翻訳によって失われてしまう意味を補足する注記を作成する。

研究方法は以下のような手順を踏む。(1)必要な参考図書、既訳や引用文献などの資料を収集し、(2)テキストと訳注の第一稿を作成、(3)講読会などを通じて訳を検討し、(4)疑問箇所、不明箇所、問題のある箇所をチベット人インフォーマントに質問する。(5)以上を踏まえて最終的な訳と注記をPDFで作成しネットで公開する。

当研究のためのチベット語単語オンラインデータベース、オンライン翻訳システムは、人文情報学科の2010年度の卒業論文のための卒業制作でほぼ完成しており、また共同で情報を集積し、公開していくためのWiki

サイトを、2011年度の人文情報学科の卒業制作において制作する予定である。

個人研究

アメリカの公共図書館における 専門職制度の総合的研究： 専門職と非専門職の枠組み

研究代表者・准教授 山本 貴子
(図書館情報学)

我が国の公共図書館界では、専門職と考えられる職務と一般的なものとを併せたものが、司書の職務として認識されていると考えられる。すなわち、司書の職務における専門職の枠組みが不明確である。

一方、アメリカでは、図書館の職員が、その職務の内容から、ライブラリアンと図書館サポートスタッフという名称で専門職と非専門職に区別されており、社会的にも両方の存在が認知されている。さらに、ライブラリアンのみならず、図書館サポートスタッフの養成教育も約40年の歴史を持つ。これは、職種と養成教育とが結び付けられた結果であろう。

筆者は、このテーマについて、「ALAの図書館情報学教育認定基準2008年版に関する考察—1992年版の改定と課題を中心に—」、「アメリカにおける図書館職員の要件と資格」など、既に4本の論文を執筆した。しかしながら、現在の研究は文献調査のみであり、実態の把握がまだなされていない。そこで、本研究では、アメリカの公共図書館におけるライブラリアン及び図書館サポートスタッフの職階・職務及び資格と養成法の実態を調査する。

本研究では、アメリカの公共図書館職員の専門職と非専門職、職階、職務、資格、及び養成法を調査し、そのシステムのメリットや課題を明らかにする。その中でも、本研究では、ケンタッキー州を対象とする。ケンタッキー州には州法と「ケンタッキー公共図書館基準」があり、奉仕対象の規模による職員の人数や職員の資格まで詳細に規定されているからである。調査対象機関については、州立図書館、大規模・中規模・小規模市立図書館、専門職・非専門職の養成機関、すなわち、Northern Kentucky University、Lexington市公共図書館などを含めた7～8機関とする。最初に、e-mailな

どでアンケート調査を、次に、現地調査を行い、その調査期間は約10日とする。

調査内容としては、図書館に対しては、現場の職員の職務内容と必要とされる要件など、大学などの教育機関に対しては、カリキュラム、取得できる学位・資格などである。調査終了後に最終確認をし、調査結果の分析を行う。

なお、本研究は、第一回目の調査である。今後、状況の異なる州を調査対象とすることで、公共図書館における図書館職員の職務と養成を正確に把握することを試みる。

個人研究

多感覚表象形成メカニズム の進化・発達の分析

研究代表者・任期制講師 高橋 真
(比較認知科学)

人間は一つの感覚様相から入力された刺激に対して、別の感覚を同時に自動的に想起する。外界認知メカニズムを知る上で、多感覚表象のメカニズムの解明は重要である。

多感覚表象が行動的に表れる例として、共感覚 (Synesthesia) と モーダル間連合 (Cross-modal association) などが知られている。共感覚とは特定の感覚モダリティの刺激を知覚したとき、同時に別の感覚モダリティを想起してしまう現象である。例えば、共感覚を持つヒトは、特定の数字に対して特定の色を数字に投射してしまう (Ramachandran, 2003)。一方、モーダル間連合とは、黄色い声というようなメタファーの中であらわされるような、多くのヒトが経験する複数の感覚情報の想起である。

共感覚の成立するメカニズムとして、経験や言語の発達などが考えられてきたが、現在のところ、神経結合の不要な結合の刈り込みが最も有力とされている (Spector & Maurer, 2009)。ただし、この刈り込みが成立する要因が経験なのか、生得的な基準で決定されているかは明らかではない。なぜならば、共感覚やモーダル間連合が現象として現れるヒトの成人の場合、経験や生得的要因が混在しているからである。そのため、多感覚表象形成がいかにして成立するかを知るためには、

経験の少ない乳幼児や生得的要因の異なる動物との比較研究が必要である。

これまでの動物の多感覚表象の研究では複雑な学習課題の成立の可否により行われてきたため、乳幼児の研究や実験環境にない動物の比較ができなかった。しかし、高橋・谷内・藤田(2010)は、動物の選好を利用して、学習を用いることなく、ラットがヒトと同じような多感覚表象を形成している可能性を示している。

そこで、本研究では、高橋ら(2010)の用いた方法を利用して、ヒトの成人で視覚・聴覚の多感覚表象が生起する刺激の組み合わせが、ヒト乳幼児、ヒト以外の動物でも同様に生じるかを調べる。その結果を比較分析することで、ヒトの多感覚統合の成立要因を探る。

引用文献

Ramachandran, V. S. 2003. The phenomenology of synaesthesia. *Journal of Consciousness Studies*, 10, 49-57

Spector, F., & Maurer, D. 2009 Synesthesia: A new approach to understanding the development of perception. *Developmental Psychology*, 45, 175-189.

高橋真・谷内通・藤田和生 2010 ラットはクロスモーダル知覚をするか? 日本動物心理学会第70回大会 東京

海外研究調査報告

ヨーロッパで見た仏教の伝道と教育の実際

一般研究(川村班) 研究代表者・教授 川村 覚昭

私は、現代西欧の仏教教育の実情調査と、明治初期に仏教再生のために渡欧し仏教の立場から日本近代化に強い影響を与えた真宗の学僧島地黙雷の資料蒐集のために、3月23日から31日までヨーロッパに行く機会を与えられた。実際に訪問したところは、スイスのチューリッヒとジュネーブ、およびドイツのデュッセルドルフとベルリンである。チューリッヒは26年前にチューリッヒ大学哲学部の客員研究員(Akademischer Gast)として長期に亘って滞在したところであり、飛行機のトランジットの関係からここを入欧の入り口とした。チューリッヒから最終目的地のベルリンまでは鉄道で移動した。

ところで、今回、ジュネーブとデュッセルドルフを訪問したのは、そこに仏教の伝道と教育の拠点があるからである。本報告ではこのジュネーブとデュッセルドルフで私が調査し垣間見た仏教の伝道と教育の一端に触れたと思う。

ジュネーブには信楽寺しんぎょうじという真宗寺院がある。この寺院は、浄土真宗本願寺派に属し、現在は、ジェローム・デュコール博士が住職を務めている。彼は、二代目の住職で、初代はジャン・エラクル師である。

エラクル師は、もともとアウグスチヌス修道会に所属

するカトリックの司祭であったが、東洋の宗教を研究するうちに仏教に惹かれ、浄土真宗に皈依した人である。彼は、カトリックの要職を務めていた司祭であるとともに、ジュネーブ民族博物館アジア部門の部長であったために、彼の改宗はヨーロッパに大きな衝撃を与えたことはよく知られている。そして彼のもとに同信の信徒が集まってできたのが信楽寺である。彼が改宗に至る経緯については自伝の“DU CROIX AU LOTUS”(和訳『十字架から芬陀利華へ』)に詳しいが、私は、チューリッヒ大学にいたときに一度お会いしたことがあり、そのときの印象は今も忘れられない。カトリックの要職を務めておられた関係からおそらく様々な批判が浴びせられたことと思われるが、真宗の獲信を経験された師には大悟した平常心が滲み出ており、後進への教化と教育に当っておられた。その伝道活動に触れ、彼の弟子となったひとり私が現住職のデュコール博士である。

デュコール博士は、ジュネーブ大学を卒業後、龍谷大学で真宗学と仏教学を学び、ジュネーブ大学から存覚の研究で学位を取得した俊英である。現在も住職の傍らジュネーブ大学で日本宗教学を講義している。私は、浄土真宗本願寺派の大谷光真門主を総裁とする財団法人国

際仏教文化協会（IABC）に関っている関係から彼とは旧知の間柄であったが、信楽寺の伝道活動については殆ど知らないでいた。しかし、今回、訪問して分ったことは、信楽寺は真宗寺院であるが、仏教伝道という枠組のなかに真宗を位置づけ、着実に真宗仏教を教化していることであった。デュコール師は、住職であるとともに研究者であり、私がジュネーブを去るさいに、今年早々にパリのLES ÉDITIONS DU CERFから出版した『歎異抄』のフランス語訳“le Tannisho”を頂戴した。

私は、信楽寺を辞したあと、デュッセルドルフに向った。ここには青山隆夫師が主宰する恵光寺がある。これは、精密機械の製作で世界的に知られる三豊の創業者である沼田恵範氏が仏教の世界伝道を願って創設した仏教伝道協会がドイツでの仏教伝道の拠点として建立した寺院である。しかし、ドイツでは、社団法人としての認可しか受けられず、そのため現在は「ドイツ『恵光』日本文化センター」という名称で活動している。沼田恵範氏が、もともと浄土真宗本願寺派の末寺の出身であることから、恵光寺は西本願寺と関係を保っている。現在、恵光寺を主宰する青山隆夫師は、富山の真宗寺院の出身で、長く東北大学教授としてドイツ文学を講じ、定年後二代目のセンター長になった人である。初代のセンター長はやはりドイツ文学者で大阪市立大学教授であった真宗僧侶の園田宗人師である。

恵光寺は、一万坪の広大な敷地に本願寺派形式の内陣をもつ本堂が建ち、ドイツを中心にヨーロッパに対する仏教伝道の中心機関となっている。このため恵光寺での伝道活動は凄まじく、仏教に関する様々なセミナーや宗教行事が行われており、僧籍をもつ日本人とドイツ人の職員が結婚式や葬式も執り行うとのことであった。特に、注目すべきことは、デュッセルドルフ市から認可された幼稚園が附設され、日本人とドイツ人の子どもを入園させて、仏教的な情操教育がヨーロッパのキリスト教文化圏のなかで実践されていたことである。また、出版活動も盛んに行われ、最近では、法蔵館から出版された『総合仏教大辞典』を独訳し、“DAS GROSSE LEXIKON DES BUDDHISMUS”として出版している。

ところで、今回、デュッセルドルフを訪問して感激したことは、東日本大震災が起った直後のため、犠牲者への哀悼と東日本復興への願いを込めて、義援金を集めるチャリティコンサートが市主催で行われたことである。私は、そのコンサートに青山師から招待され、デュッセルドルフ市民と交歓の場をもつことができたが、彼らが日本に寄せる思いには大変強いものがあることを感じた。私は、そうした心情の背景にはふだんから地道に活動する恵光寺の影響も多々あるように思えた。青山師の

説明によると、恵光寺は現在ではデュッセルドルフ市の名所のひとつになっているとのことである。

私は、短い期間ながら信楽寺と恵光寺を訪問して、仏教の伝道と教育の実情について様々なことを知ることができた。その調査から言えることは、ヨーロッパ社会にも仏教に対する理解が着実に進んでいたことである。福島県原発事故が示すように、最先端の科学への慢信が却って科学への不信を招来しているとき、人間の罪障性を深く覚醒する仏教が今後ともキリスト教との対話を通して益々理解されることを期待したいと思う。



恵光寺の本堂で青木隆夫師（右）と写す

国内研究調査報告

「真宗同朋会運動における求道と獲信の研究」

真宗同朋会運動研究 研究代表者・教授 水島 見一

◇研究の目的

本研究は、真宗と社会との関わりを主題とし、具体的には真宗同朋会運動における求道と獲信に学ぶものである。同朋会運動は、本来、地域に根ざした草の根運動である。したがって、本研究は、一人ひとりにおける「群萌としての目覚め」、特に求道の道程に焦点をあてて、一人ひとりの宗教的人格に触れることを通して、真宗同朋会運動の意義を明らかにすることを目的とする。

また、信仰が生み出す社会性、および人々の精神性に与えた影響なども調査を通して把握し、真宗同朋会運動の現状や社会的・現代的意義を明らかにしていく。

以上のことから、

①理論編：本研究の基礎研究である。ここでは同朋会の歴史と社会的背景、同朋会運動への教団の施策、同朋会運動の中心人物に関する資料を収集し、整理していく。同朋会運動の中心人物については、以下の人物に焦点をあてて、思想やその背景の把握につとめている。

・高光大船 ・高光一也 ・訓覇信雄 ・松原祐善 ・藤原鉄乗 ・坂木恵定 ・米沢英雄 他

また学外研究者等による公開研究会を開き、学外研究者による公開研究会を行い、多角的な同朋会運動への確かめを行っている。

②調査編：本研究の中心であり、門信徒の方々に「聞き書き」という調査手法を用いた調査を展開する。そのことを通して、宗教的人格を具体的に明らかにしていく。

③出版：本年度は、研究成果の出版に向けて具体的に進めていく。

といった三つの柱から、具体的に研究を展開している。

今回の報告では、本研究班が行ってきた公開研究会と聞き書き調査の中から、それぞれいくつかを取り上げて報告する。また出版物の目次案の概略を合わせて報告する。

◇公開研究会

同朋会運動の社会的意義を明確化していくために、宗門内・外両面からの意見・研究報告を公開研究会として行った。2010年度4月以降の公開研究会は、マルチメディア

演習室（響流館3階）において、以下のとおり開かれた。

①5月20日 上田閑照先生（京都大学名誉教授）

テーマ：清沢満之とは誰か ―当時に於て、そして現在の私たちにとって―

上田先生には、「清沢満之とは誰か ―当時に於て、そして現在の私たちにとって―」と題して、御講演をいただいた。その中で、「清沢満之」の信念の特徴を、「修養と他力の信念との反復」という視点で確認していただいた。そのことが現代に生きる私たちにとって、いかに具体的で重要な意義をもっているかという提言をいただいた。

②7月22日 亀井鑑先生

テーマ：真宗同朋会運動について ―その歩みと今後の展開―

亀井先生は、長年生活に基づいた真宗への学びをされてこられた方である。その視点から「真宗同朋会運動について ―その歩みと今後の展開―」と題して、御講演いただいた。その中で、具体的な日常のエピソードを通して、「生きた真宗」の具体相をお話しされた。そして真宗の学びが、実践と深く結びつくことの意義を語っていただいた。また、今後の真宗を担う若者たちへの熱いメッセージを伝えていただいたことである。

現在は、これらの公開研究会をうけて、整理・分析を進めている。

◇「聞き書き」調査

聞き書き調査は本研究の中心であり、門信徒の方々に「聞き書き」という調査手法を用いた調査を展開している。また昨年度の調査に対する補足調査も同時に行っている。

本調査は、「聞き書き」という手法の特性から、1件あたりの調査時間に膨大な時間を要する。本報告では2名の方を取り上げ、聞き書き調査の概略のみを報告する。

①山上一宝氏（東京）

山上氏は、長川一雄先生との値遇を通して、真宗に出遇われた東京在住の御門徒である。氏は「行徳庵」という長川一雄先生が開かれていた私設の聞法会を引き継がれ、毎月ご自宅を道場とされている。仕事でのご苦勞が、全て「よき人」長川一雄先生の讃嘆に収斂されて、ご苦勞を感じさせない明るさであった。

②田口タズ子氏（大阪）

田口氏は、息子さんが急に亡くなられたのがきっかけで、真宗の教えを聴聞されるようになった御門徒である。まだ、真人舎がまだ活発に活動しておられた頃に、同朋会運動に参画され、聞法の姿勢を問われる厳しい聴聞の中で、頭の下がらない自分に出遇われたのである。その頭の下がった世界に、「息子がいる」とおっしゃっておられたのが、とても印象的であった。

◇出版目次案

本研究班の研究成果を出版する計画を進めている。現

在進めている構成を、おおまかに示せば以下のような目次案である。

題 目：(仮)『現代に生きる親鸞一門信徒からの聞き書き調査を中心として』

目 次：序文

第一部 現代社会における親鸞思想の可能性
※主に公開研究の内容を整理、成文化した内容とする予定。

執筆予定者：水島見一、二階堂行邦、亀井 鑑、上田閑照、下田正弘、マイケル・パイ、末木文美士 他

第二部 民衆の生活に根付く親鸞(門信徒編)
※主に聞き書き調査結果から構成予定。

あとがき

年表

※戦後日本の社会動向や宗教史の概略など

出版事業については、今後さらに進め、内容を充実させていく予定である。

「浄土真宗における社会実践展開の再構築 —保育・教育・福祉への視座」

研究代表者・教授 佐賀枝 夏文

◇研究の目的

仏教を端緒とする社会実践は数多くある。その中でも浄土真宗系は規模・内容ともに充実している。そこで本研究における全体構想は、浄土真宗、中でも真宗大谷派（以下、真宗とする）に立脚した社会的実践、特に保育・教育・福祉の3つの領域における歴史的背景と現状を調査し、厳密且つ濃厚な真宗教学と社会的実践展開における課題を抽出し、そのことから、改めて仏教から広く社会へ提起することである。そのための①基礎研究から②実践研究を展開していく。そして現在までに、真宗大谷派が保育・教育・福祉の領域において、全国で実践展開している関係機関・学校等と研究協力関係をもとに、予備調査と資料収集を行った。

◇研究の展開

近代以降、真宗教学に立脚する真宗大谷派（東本願寺）は、保育・教育・福祉の3つの領域に対して、具体的な社会的実践を展開している。その中には、3つの領域に

における先駆的な事業展開も数多くあり、現代に至るまで、その実践の基盤となっているものも少なくない。しかし、現状においては、その社会的実践の拡大において、所謂、実践理念が真宗教学と乖離してしまい、その実践の根拠を見失ってしまっているものもある。それによる実践現場での混迷は、深刻かつ急務な課題となっている。

以上のような本研究に対する実践現場からの要請もあり、本研究では、真宗教学と社会的実践展開とが、如何に切り結び、真に社会に貢献していくことができるのかを、実践の場と密に連携しながら明らかにしていくことを研究テーマとした。

真宗大谷派の実践の場としては、教育事業では、現在、真宗大谷派学校連合は、大学8校、短期大学9校、高等学校19校、中学校5校、小学校1校、幼稚園1園の構成となっている。また保育事業においては、社団法人大谷保育協会があり、加盟園は幼稚園・保育園合わせて、現在約500園を抱え、実践を展開している。このように、真宗教学を背景とする多くの社会実践の場が、現に展開

していることは、本研究において、他にはない大きなスケールメリットであると同時に、社会的責任は非常に大きく、本研究の課題である、真宗教学と社会实践の展開との切り結びを明らかにすることは急務な課題である。

◇公開研究会

実践の場に立脚した研究を展開するために、共同研究員として真城義麿先生（前大谷中・高等学校校長）と脇淵徹映先生（社団法人大谷保育協会理事長）に加わっていただき、公開研究会や各現場との研究連携を展開する基盤を確立した。

<教育部門>

その上で教育部門では、長年真宗教育に尽力された元大谷中・高等学校校長の広小路亨先生の教育実践を取り上げて、大谷中・高等学校（上寺文美）、京都光華女子中・高等学校（高田正城）、東大谷高等学校（大間実）、大成高等学校（城金明生）を中心として、4回の公開研究会が行われた。

①テーマ：「真宗と教育実践 ―現場からの経験をとおして―」

講師：真城義麿 大谷中・高等学校校長
高田正城 京都光華女子中・高等学校教諭
大間実 東大谷高等学校教諭
城金明生 大成高等学校教諭

②テーマ：「広小路亨先生に学ぶ ―真宗教育の今後について―」

講師：宮城 駿 真宗大谷派関係学校連合顧問
協議者：高田正城 京都光華女子中・高等学校教諭
大間実 東大谷高等学校教諭
城金明生 大成高等学校教諭
上寺文美 大谷高等学校非常勤講師

③テーマ：「広小路亨先生に学ぶ ―真宗教育の今後について―」

講師：多田孝圓 元大谷中学高等学校校長・現真宗大谷派圓乗寺住職
協議者：高田正城 京都光華女子中・高等学校教諭
大間実 東大谷高等学校教諭
城金明生 大成高等学校教諭
上寺文美 大谷高等学校非常勤講師

④テーマ：「広小路亨先生に学ぶ ―真宗教育の今後について―」

講師：福島和人 大谷専修学院講師
協議者：高田正城 京都光華女子中・高等学校教諭
大間実 東大谷高等学校教諭
城金明生 大成高等学校教諭

上寺文美 大谷高等学校非常勤講師

<保育部門>

真宗保育に関しては、真宗大谷派宗務所教育部と（社）大谷保育協会と常に連携しながら、様々な研究活動を展開している。その中で本研究班として研究展開の一つとしては、文献資料の収集と整理が挙げられる。

真宗大谷派の保育事業は、わが国の保育事業の中でも先駆的な展開をしてきた。その歴史を文献資料の整理や（社）大谷保育協会に長年関わってこられた方々へのヒアリングをとおして、真宗大谷派の保育「真宗保育」の歩みを整理している。

多くの先駆的な保育雑誌や教材等が発行・制作されてきたが、そのほとんどが散逸してしまっているのが現状であり、貴重資料の収集は急務であった。その貴重資料を長崎県佐世保市の西心寺に所蔵されており、研究調査に赴き、貴重書の確認と借用をお願いし、製本管理することができた（写真参照）。



保育雑誌「児童と宗教」



日曜学校用に作られた真宗を題材にしたカルタ

<福祉部門>

真宗大谷派は明治期において、多大な社会貢献の足跡を残している。大谷派慈善協会による雑誌「救済」の出版、その後の仏眼協会による点字雑誌「仏眼」の出版は輝かしい業績として高く評価されている。このような「あゆみ」をもった真宗大谷派の社会福祉の実践、その理念について先人の業績の顕彰すること、また基盤整備をすすめることが目的のひとつである。具体的な先人としては、「中村久子」を取り上げ研究調査した。

「障がい」ということを考えるにあたり、「価値」の問題に取り組む必然性がある。現代は、様々な面で「得ること」に価値観をおいている。逆に「失うこと」を嫌う傾向がある。

この価値観は、「近代化」に強く影響されていると考えられる。そして現代は、自由競争を原理とする市場経済社会から成り立っている。その自由競争は、「得ること」に価値をおき、「他者よりもたくさんの財を得たものが勝者となる」ような「優勝劣敗」の社会を出現させたのである。障がい者（児）が、このような価値観の社会で暮らすには、就学からはじまり、就労や日々の暮らしにいたるまで困難があるのである。

今回取り上げた中村久子氏は、まさに喪失の連続の人生であった。そして時代や社会の障がい者への無理解、偏見に満ちたなかでの厳しい生活であったのである。そのなかで中村久子は仏教の教えにであって行くのである。仏教にであってからの中村久子の生き方は、「障がい」のある仲間たちの「ともしび」として、「生きる」勇気を与え続けた生涯へと転換されたのである。その足跡は、昭和40年に高山国分寺境内に悲母親音像の建立が実現したこと。またヘレン・ケラー女史との三度にわたる会見と出会いは、その功績を顕彰する出来ごとといえるだろう。その中村久子の転換された「生き方」を端的に表す文章がある。

たくさんの方々の善知識によって教え導いて頂いたお蔭でここまで連れて来て頂きましたが、ほんとうの善知識は、先生ではなく、それは私の体、「手足が無いことが善知識」だったのです。

（中村久子著『こころの手足』春秋社 p.192）

この中村久子の言葉は、「障がい」をマイナスと考えている私たちに新たな気づきと勇気を与えるものである。「失った」手足こそが、自分を導いてくれた先生（善知識）であると受け止めた生き方は、見事な「障がい受容」といえるだろう。「失うこと」で「見えた世界」、また「失わなければ、見えない真実の世界」を提示している。

真宗大谷派の関わった重要な福祉事業として、「仏眼

協会」がある。協会の背景には、僧侶和田祐意の存在がある。和田は、高齢者施設「京都養老院（現・同和園）」（京都仏教護国団の清水寺・大西良慶師の発意）の設立の専任職員として着任する。しかし仕事半ばで眼病を得て「中途視覚障がい者」となる。その後、和田は「視覚障がい者」のために奔走することになり、組織づくりを発意し、真宗大谷派の宗務当局へはたらきかけ、教団が動きだすことになる。そして和田は、後に山本暁得と出会い、事業を展開していくことになる。山本は幼児期に眼病を得て「中途視覚障がい者」となり、キリスト教に入信し、鍼灸師として後進の養成に従事していた。山本はのちに仏教の教えと出会い、仏教僧となるのである。山本は、和田の「願い」を受け、事業を展開していくことになり、組織としての活動をはじめていくのである。それが京都仏眼協会である。

この京都仏眼協会の事業展開には、「点字」の仏典作成、点字月刊誌『仏眼』の発行、出版のための「弘誓社」設立などがある。この事業は現在の京都ライトハウスの出版部へと引き継がれていくのである。また当然の事業展開として、「視覚障がい者」の生活を支えるための事業、鍼灸師の養成（仏眼厚生学校の設立運営）も展開される。さらに事業は、眼病に対する治療施設としての眼科医院の設立へと展開していくのである。この展開は、わが国から「眼病トラホーマー」を撲滅することに大きく貢献したのである。

この仏眼協会の事業展開は、仏教の教えから社会福祉事業を展開する「実践モデル」、「起業モデル」、「ソーシャルアクションモデル」として重要な意味を持っていることを、本研究は研究調査をとおして明らかにしたのである。

共同研究及び公開研究会報告

台湾佛光大学の奥村浩基助理教授による公開講演会

「台湾の仏教と仏教研究」と佛光大学における本学教授による日本浄土教講義について

国際仏教研究 研究代表者・教授 ロバート F. ローズ

国際仏教研究班では2011年2月10日(木)の16:20から、台湾佛光大学の奥村浩基助理教授をお迎えして、「台湾の仏教と仏教研究」の講題のもと、マルチメディア演習室(響流館3階)で、草野顕之学長を初め20名の教員・学生などの出席を得て公開講演会を開催した。奥村教授は大谷大学仏教学科のOBで、律蔵における因縁物語についての研究で博士号を取得された後、台湾に渡り、現在佛光大学の宗教学科で教鞭を取られている若き研究者である。今回の講演では、日本ではあまり馴染みのない台湾仏教について、現地での長い生活を通じて得られた経験をベースに、約1時間半のあいだお話をいただくことができた。以下、講演内容を簡単に報告する。

奥村教授は講演の冒頭で、台湾の民族・言語・文化・歴史などについて簡単に説明し、道教・仏教・キリスト教が三大宗教であることを指摘した後、いくつかのキーワードを挙げて台湾仏教について紹介された。最初のキーワードは「正信仏教」であるが、これは道教や民間宗教の影響を排除した仏教のことである。1949年に国民党が台湾に移るまで、台湾の仏教は道教・儒教や民間信仰の神々が混淆した宗教であった。しかし1949以降、仏教以外の要素を排除した正信仏教が強調されるようになった、とのことであった。

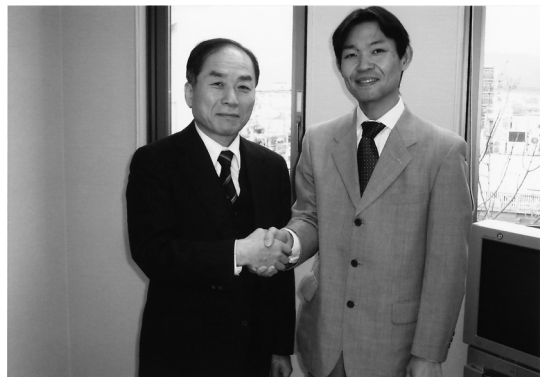
次のキーワードとして紹介されたのが「伝戒運動」であった。日本統治時代、台湾では日本と同様に肉食妻帯の僧侶が多かったが、1945以降、厳格な出家主義が強調され、僧侶になるためには伝戒(受戒)し、出家することが要求されるようになった。これを伝戒運動と呼ぶようである。さらに以前は、出家するためには台湾の中国仏教教会が独占的に行う伝戒式に出席することが必要であったが、1987年以降、当時台湾政府が進めていた民主化の影響もあり、各寺が自由に伝戒式を行えるようになった。そのため、現在台湾では国内の出家者の数は正確に把握できなくなっているようである、という興味深い点も付け加えられた。ちなみに、台湾の出家者は80%が女性で、20%が男性であり、僧侶の数より尼僧の数のほうが圧倒的に多い。これも台湾仏教の顕著な特徴の一つである。

さらに台湾仏教のキーワードとして「人間仏教」(じんかんぶつきょう)が挙げられる。

「人間仏教」とは印順導師(1906-2005)が提唱したものであるが、仏教は死者のためではなく、生きている人間のためにあるものであるという理想を掲げ、それを学術的・論理的に組織した仏教のことである。現在台湾にある佛光山・慈濟功德会・法鼓山などの主要教団は、みな人間仏教をその理念としている。

また4月13・14の両日には佛光大学の要請を受け、筆者は佛光大学仏教学系(日本で言う仏教学部)で、鎌倉時代の浄土教について英語で講義を行った。13日の講義題目は“Pure Land Buddhism in Kamakura Japan: The Case of Honen (1133-1212)”(「鎌倉時代の浄土教—法然(1133-1212)について」)、14日の題は“Pure Land Buddhism in Kamakura Japan: Developments under Shinran (1173-1262)”(「鎌倉時代の浄土教—親鸞(1173-1262)における発展」)であった。両日の講義にはチベット仏教を専門とし、以前真宗総合研究所でも講演を行った劉国威教授や奥村教授も出席していただき、仏教学系の教員・学生25名が熱心に聴講し、活発な質疑応答を交えながら講義が行われた。

以上のように本学と佛光大学では、仏教研究を中心に活発な学実交流が行われているが、今後も、両大学の交流がさらに発展することを期待する。



奥村浩基助理教授(右)と草野顕之大谷大学長

中国社会科学院歴史研究所との共同研究・公開研究会報告

国際仏教研究 研究員・准教授 松浦 典弘

本学真宗総合研究所と中国社会科学院歴史研究所は、2010年3月に学术交流協定を結び、末永く交流を深め、双方の研究に寄与することを目指している。この度その一環として、中国社会科学院歴史研究所から、賈衣肯副研究員、李花子副研究員の2人が来日され、両先生の御報告による公開研究会を開催することができたので、その概略を報告する。

公開研究会は3月2日(水)午後4時から6時まで、本学響流館3階のマルチメディア演習室において行われた。本研究班からは研究員の桂華淳祥・浅見直一郎両教授、研究補助員で通訳担当の王奕明氏、及び松浦が出席した。

まず、賈衣肯氏が「《魏書序紀》在探訪蒙古高原古代游牧民族發展史問題中的史料價值（《魏書序紀》のモンゴル高原古代游牧民族發展史の問題の検討に際しての史料價值）」と題して報告された。モンゴル高原の古代における游牧民族の活動は、史料の制約から明らかでない点が多い。氏は『魏書』の序紀に中原に影響のあった游牧民族の記事が比較的多く残されていることや、諸部族の興亡に関する記載内容が比較的に詳しいことなどに価値を見出され、游牧民族の部落の移動に関する問題の重要性を述べられた。

次いで、李花子氏が、「図們江水源与中朝边界（図們江水源と中朝国境）」と題して報告された。清代の中国と朝鮮の国境問題を専門とされる先生は、2010年に中朝国境で現地調査を行われており、御報告はそれを踏まえ、また最新の画像を利用してのものである。康熙年間に国境が定められ、柵が設けられた図們江の水源に関して、文献史料と併せて古地図も用いられ詳細な分析を加えられた。

両氏の報告とも、最新の成果を踏まえた興味深いものであり、参加者にとって大変有意義なものであった。研究会終了後は、会場を移して懇談会が開催された。両先生のご発表に関して引き続き活発に意見を交わしつつ、鍋をつつきながら和やかな雰囲気のもと、楽しいひと時を過ごすことができた。

両氏は、2月28日(月)に到着され、3月6日(日)まで京都に滞在された。この間、2日(土)には藤嶽明信学術センター長を表敬訪問され、意見交換を行い、相互の交流を深めた。また、4日(金)には福島重任期制助教の案内によ

り奈良の東大寺・興福寺などにおいて仏教史蹟調査をされ、5日(土)には王研究補助員の案内により二条城など京都観光も楽しまれた。

残念ながらシステム変更のための休館期間にあたってだったので、本学図書館の利用はかなわなかったが、真宗総合研究所や総合研究室において精力的に研究に努められた。また、京都大学など周辺大学においても資料収集が行われると同時に、研究者との交流活動を積極的にこなされた。

短期間の慌しい日程ではあったが、両氏とも充実した日々を過ごされたようである。協定が結ばれてから1年がたったこの時期に、両氏を招聘できたことは誠に喜ばしいことである。今後ますます充実した学术交流が行われ、双方にとって有意義な成果を上げることができるよう努めたい。



中国社会科学院歴史研究所 賈衣肯副研究員(左)と李花子副研究員(右)

研究成果報告会

2010年度「指定研究」研究成果報告会

真宗総合研究所主事・准教授 采翠 晃

2011年3月3日(木) 13:00~14:40に、メディアホール(響流館3階)において、2010年度「指定研究」研究成果報告会を公開で行った。草野顕之学長はじめ、藤嶺明信研究所長、研究所委員会委員、各研究班研究員など、多数の出席者を得て、盛況であった。

本報告会では、5つの指定研究から7研究班がそれぞれ報告を行った。

1 「御遠忌記念特別指定研究」

「親鸞像の再構築」を研究テーマとして掲げて進めてきた親鸞研究をもとに、御遠忌記念論集を企画・編集した。思想面からの研究成果を公表する「『教行信証』の思想」と、歴史学の分野からの研究成果、親鸞思想を基盤にして近現代という時代とその時代の問題・課題に光をあてる論稿を収録する「親鸞像の再構築」の、上下二巻となる論集の編集・執筆に取り組んだ。論集の出版は、2011年度を予定している。

あわせて、親鸞研究を概観するための文献目録を作成中である。

2 「国際仏教研究」

2010年5月5、6日に、学術交流協定機関である、フランス国立高等研究院(EPHE)の宗教社会学部門において、シンポジウム「フランスと日本におけるナショナルアイデンティティと宗教」を共同開催し、本研究所からは6人の研究員が発表した。2009年度に学術交流協定機関となった、中国社会科学院歴史研究所(北京)とは、双方の研究者が往来し、共同研究会を実施した。

2010年8月15~21日に、第20回国際宗教学・宗教史学会学術大会がカナダのトロント大学で開催された際、研究員を派遣して研究発表を行った。

翻訳事業については、佐々木月樵「大谷大学樹立の精神」の英訳研究を進めるとともに、ディートリッヒ・コルシュ『マルティン・ルター』については翻訳作業を終え出版準備に取り組んでいる。

また、大谷大学図書館所蔵「東本願寺旧蔵資料」海外布教関係部分の目録作成作業を継続して行っている。

あわせて、2011年度に開催予定の国際真宗学会(IASBS)、ヨーロッパ日本研究協会(EAJS)国際会議のパネル開催、ルドルフ・オットー・シンポジウムでの発

表準備に精力的に取り組んだ。

3 「西蔵文献研究」

ダルマキールティの主著のひとつ『量決択』に対する古い注釈書である、ツァンナクバの『量決択』の電子テキスト化を完了した。本書は、本学所蔵写本が唯一の資料という貴重な資料でもある。あわせて『ミラレーパ十万歌』のテキストの校正が完了、『チベット語訳大唐西域記』、『シェン・ニマ伝』のテキストデータをWebページ上に公開した。本学図書館所蔵『サンブ寺歴代座主記』、『目連救母経』、『入中論註』のデジタル写真撮影を行った。また、本学図書館に所蔵されているチベット語文献の検索システムについて、翻字の統一などの整理作業を実施した。

4 「大谷大学DB研究」

2010年度の科学研究費補助金(研究成果公開促進費)に採択された「北京版西蔵大蔵経データベース」(代表者兵藤一夫教授)を、日本写真印刷株式会社の協力を得て完成した。データベースは、テンギユルの中観部と唯識部を対象に、約6000万画素の高精細のデジタル画像により構成され、Web上で公開した。これと並行して、マイクロフィルムのPDF化も継続している。

真宗関係文化財のデジタル化作業では、安田理深先生の講演テープ87本および、横山写真館資料のデジタル化(撮影終了)と目録作成に取り組んだ。また、継続的に取り組んできたパーリ語貝葉写本のデジタル化では、タイの寺院に所蔵されている文献の現地調査を実施した。

図書館所蔵古典籍のデータベース作成、博物館所蔵古地図のデータベース構築についても、今年度から取り組みを開始した。

5 「真宗同朋会運動研究」

本研究は、真宗同朋会運動の歴史と現状を「聞き書き」を通して把握し、その現代的意義を明らかにすることを目的とするものである。今年度は、理論面では、真宗大谷派宗門内で同朋会運動に尽力リードしてきた人物に焦点を当て基礎資料の作成に努めた。また、同朋会運動の社会的意義を明確化していくために、講師を招いて公開研究会を開催するとともに、前年度開催分の講録

化を進めた。

これらに加えて、真宗大谷派教学大会での研究発表、真宗大谷派研修部と共同での「親鸞キャンプ」開催、東京大学での「親鸞ルネッサンス」参加などの研究活動を展開した。

昨年度まではマルチメディア演習室で開催していたのであるが、より多くの人に参加することを期待して、今年度よりメディアホールでの開催となった。

必ずしも幅広いとは言えないものの、大学院生や研究補助員の参加も見られ、徐々にではあるが、充実した報告会となりつつある。今回は、今年度よりも更に充実したものとなることを期待するものである。



「指定研究」研究成果報告会で挨拶する草野顕之学長
於メディアホール

真宗総合研究所彙報 2010. 10. 1～2011. 4. 30

■研究所関係

◎真宗総合研究所委員会

- ◇12月22日(水) 16時20分～ 第2会議室(博綜館5階)
 1. 2011(平成23)年度「一般研究」の選考について
 2. その他
- ◇3月10日(木) 13時～ 第4会議室(博綜館5階)
 1. 2010(平成22)年度「指定研究」の研究成果について
 2. 2011(平成23)年度「指定研究」の研究計画について
 3. その他
- 「指定研究」研究成果報告会
- ◇3月3日(水) 13時～ メディアホール(響流館3階)
 1. 2010(平成22)年度「指定研究」研究成果について
 2. その他

大谷大学親鸞聖人750回御遠忌記念特別指定研究 (2011.4.1～4.30親鸞関係文献目録資料室)

2010年度活動記録(10月1日～)

○2010年12月8日(水) 12:10～13:00
(真宗総合研究所ミーティングルーム)

第24回研究会

・御遠忌記念論集について

○2011年2月16日(水) 13:00～14:30
(真宗総合研究所フリースペースデスク)

文献目録パート会議

○2011年2月18日(金) 13:00～14:30

(真宗総合研究所フリースペースデスク)

文献目録パート会議

○2011年2月25日(金) 13:00～14:30

(真宗総合研究所フリースペースデスク)

文献目録パート会議

○2011年2月28日(月) 13:00～15:30

(真宗総合研究所ミーティングルーム)

第25回研究会

・御遠忌記念論集について

・文献目録について

○2011年3月17日(木) 13:00～14:30

(真宗総合研究所フリースペースデスク)

文献目録パート会議

なお、上記研究会並びにパート会議の他、論集の編集作業として、出版社との協議や研究員同士による意見交換会を実施している。また日常的に文献目録作成のための作業を行っている。

国際仏教研究

(英語班)

《会議・研究会》

◇国際真宗学会(IASBS)第15回学術大会の準備会議

①2010年9月14日(火) 16:00～18:00 於:会議室
(響流館4階)

②2010年12月15日(水) 14:30～16:00 (於:加来教授研究室)

③2011年2月9日(水) 15:30~17:00 (於: 加来教授研究室)

④2011年3月1日(火) 14:00~16:00 (於: 真宗総合研究所フリースペース)

⑤2011年3月3日(木) 12:00~13:00 (於: ドビンス教授客員研究室、パネルについて)

◇ヨーロッパ日本研究協会第13回国際会議 大谷大学パネルの準備会議

①2010年9月30日(木) 17:00~18:00 (於: ローズ教授研究室)

◇佐々木月樵「大谷大学樹立の精神」翻訳研究 第9回研究会 2011年2月22日(火) 16:00~18:00

於: 真宗総合研究所ミーティングルーム

第10回研究会 3月1日(火) 16:00~18:00

於: 真宗総合研究所ミーティングルーム

《公開講演会》

① 2011年2月10日(木) 16:20~18:00

於: マルチメディア演習室(響流館3階)

講師: 奥村浩基氏

(台湾佛光大学・専任助理教授)

題目: 台湾の仏教と仏教研究

また上記の他、従来収集してきた仏教関係の洋書・学会誌のデータベース公開のために資料収集・整理を随時行っている。

〈ドイツ・フランス班〉

◇2010年5月5-6日に開催されたシンポジウム“National Identities and Religion: A French-Japanese Comparative Approach” (於 フランス国立高等研究院) にて行われた口頭発表(発表者: ロバート・F・ローズ、井上尚実、村山保史、飯田剛史、藤枝真、番場寛)を、各発表者が論文化する作業を行っている。国立高等研究院のフィリップ・ポルティエ教授の協力を頂き、フランスにて公刊する予定である。

〈中国班〉

①大谷大学図書館所蔵真宗大谷派海外布教資料(通称: 田代文庫所蔵)の目録作成

中国華中関連の綴資料(仮番号26~)の目録作成作業を継続中。引き続き、残された資料に順次着手している。

②中国社会科学院歴史研究所の共同研究

2011年2月28日(月)~3月6日(日)、李花子副研究員、賈衣肯副研究員を招聘し、浅見直一郎研究員、桂華淳祥研究員、松浦典弘研究員とともに本学にて研究活動を行

い、公開研究会を開催した。

3月2日(水) 16:00~18:00 於: マルチメディア演習室(響流館3階)

○《魏書序紀》在探討蒙古高原古代游牧民族發展史問題中的史料價值

中国社会科学院歴史研究所 賈衣肯副研究員

○図們江水源与中朝边界

中国社会科学院歴史研究所 李花子副研究員

西藏文献研究班

《公開研究会》

◇11月30日(火) 16時20分~ マルチメディア演習室(響流館3階)

野村正次郎氏 (広島修道大学非常勤講師)

「iPadにおけるチベット語の利用について」

◇12月14日(火) 16時~ マルチメディア演習室(響流館3階)

更尒博士 (西藏文献研究班嘱託研究員・青海民族大学蔵学院教授)

「ミラレーバ研究の価値」

《研究打ち合わせ》

◇7月27日(火) 16時~ (真宗総合研究所ミーティングルーム)

議題: 研究業務の進捗状況の確認

◇2月15日(火) 17時10分~ (真宗総合研究所ミーティングルーム)

議題: 今年度の活動成果の確認

◇4月26日(火) 16時20分~ (真宗総合研究所ミーティングルーム)

議題: 今年度の研究業務内容の確認

《出張》

◇8月15日(日)~8月21日(土)

ツルティム・ケサン名誉教授(嘱託研究員)

出張先: カナダ・バンクーバー

目的: 国際チベット学会参加

《招聘》

◇11月28日(日)~12月28日(火) 更尒教授(青海民族大学蔵学院教授)

目的: 11世紀を代表するチベットの宗教家・詩人ミラレーバの伝記に関する研究を共同で行なうため

大谷大学 DB 研究

(2011.4.1~4.30デジタル・アーカイブ資料室)

《出張》

◇2011年2月7日(月)~2月28日(月)

*但し、大谷大学DB研究の業務は、2月18日(金)まで。

終了後、続けて日本学術振興会科学研究費：研究活動スタート支援の業務を2月28日まで行う。）

出張者：清水洋平（嘱託研究員）

出張先：タイ王国バンコク

目的：タイ王国第一級王室寺院Wat Arunratchawararam（通称Wat Arun）所蔵の貝葉写本に関わる共同研究並びに打ち合わせ会議・調査。

真宗同朋会運動研究班

〈事務連絡および定期研究会〉

◇2010年度：毎週月曜日 13：00～16：10（3・4限）
定期的に研究会、調査のテープ起こしとその成文化、そして、内容の位置づけを行うため、読み合わせを実施した。

◇2011年度：毎週月曜日 13：00～16：10（3・4限）
本年度は出版に向けての内容の検討会議や校正作業を行って行く予定である。

《研究会および「聞き書き」調査》

◇聞き書き調査の実施は、本研究の中心課題であり、主に門信徒の方々に行う調査である。

本調査は、「聞き書き」という手法の特性から、1件あたりの調査時間に膨大な時間を要する。また2010.10～2011.4末までに行った調査は、新潟県と石川県にて行った。

なお本調査の結果は、現在精査しており、随時補足調査も行っている。

大谷大学史資料室（2010.5.1～2011.4.30）

【他大学との交流】

・2010年6月4日
全国大学史資料協議会西日本部会2010年度総会ならびに第1回研究会

於 関西大学千里山キャンパス

参加者：大畑博嗣・香月 拓（研究補助員）

・2010年7月21日
全国大学史資料協議会西日本部会2010年度 第2回研究会

於 あおぞら財団附属 西淀川・公害と環境資料館（大阪府大阪市西淀川区）

参加者：香月 拓（研究補助員）

・2010年10月6～8日
全国大学史資料協議会2010年度総会ならびに全国研究会

於 放送大学熊本学習センター（熊本大学内）・熊葉

ミュージアム（熊本大学大江キャンパス）・熊本市歴史文書資料館（熊本市役所花畑町別館3F）

参加者：大畑博嗣・香月 拓（研究補助員）

・2010年12月14日
全国大学史資料協議会2010年度第4回研究会
於 同志社大学室町キャンパス寒梅館、Neesima Room（同志社社史資料センター展示室）
参加者：大畑博嗣・香月 拓（研究補助員）

【会議等】

・2011年4月8日
於 真宗総合研究所事務局内、資料室作業スペース
参加者：采罫 晃（室長）、戸次顕彰（嘱託研究員）、稲葉維摩（研究補助員）、大畑博嗣（アルバイト）
内容：前年度までの作業報告と、今年度の活動内容の検討。資料室所蔵資料の見学

上記の活動以外にも、大谷大学史資料室では『大谷大学資料』・資料室所蔵写真資料の再調査・長期保存作業を進める一方で、史料の閲覧・貸出や質問などへの対応等を日常業務として行った。

真宗本廟（東本願寺）造営史資料室（2010.10.1～2011.3.31）

2010年度の研究計画と編集計画に基づき、『真宗本廟（東本願寺）造営史一本願を受け継ぐ人びと一』の編纂・刊行作業を鋭意推進した。各種原稿の整理・読み合わせ・編集・校正、及び引用・典拠資料等の確認作業をおこなうと共に、本編及び資料編に掲載予定の史料・図版類を再確認した。引き続き、重要資料の選定・撮影をおこなうことによって、造営史関連諸資料の調査・研究を継続し、編纂・刊行事業を補完する。

《原稿読み合せ会》

第37回原稿読み合せ会

◇10月6日(水) 14：00～19：00

場所：真宗総合研究所ミーティングルーム

第38回原稿読み合せ会

◇10月13日(水) 14：00～19：00

場所：真宗総合研究所ミーティングルーム

第39回原稿読み合せ会

◇10月27日(水) 14：00～18：30

場所：真宗総合研究所ミーティングルーム

第40回原稿読み合せ会

- ◇11月3日(水) 11:00~16:00
場所：真宗総合研究所ミーティングルーム
第41回原稿読み合せ会
- ◇11月15日(月) 14:00~19:00
場所：真宗総合研究所ミーティングルーム
第42回原稿読み合せ会
- ◇11月17日(水) 14:00~20:30
場所：真宗総合研究所ミーティングルーム
第43回原稿読み合せ会
- ◇11月22日(月) 13:30~17:30
場所：真宗総合研究所ミーティングルーム
第44回原稿読み合せ会
- ◇12月1日(水) 14:00~18:30
場所：真宗総合研究所ミーティングルーム、会議室
(響流館4階)
第45回原稿読み合せ会
- ◇12月8日(水) 14:00~19:30
場所：真宗総合研究所ミーティングルーム
第46回原稿読み合せ会
- ◇12月15日(水) 10:30~20:30
場所：真宗総合研究所ミーティングルーム
第47回原稿読み合せ会
- ◇1月12日(水) 13:30~14:00
場所：真宗総合研究所ミーティングルーム
第48回原稿読み合せ会
- ◇1月19日(水) 13:30~19:00
場所：真宗総合研究所ミーティングルーム
第49回原稿読み合せ会
- ◇2月1日(水) 14:00~19:00
場所：真宗総合研究所ミーティングルーム

《その他》

- ◇11月1日(月)
用務：資料編等絵図面写真撮影
場所：本学博物館
- ◇11月19日(金)
用務：資料編絵図面写真撮影
場所：真宗大谷派長浜別院大通寺（滋賀県長浜市）
- ◇2月16日(水)
用務：本編指図（衝立類）写真撮影
場所：東本願寺御影堂

■人事(2011年4月1日付)

研究所主事(新) 采翠 晃(旧) 山本和彦

□客員研究員

* 劉 秀麗 (Liu Xiuli)

研究期間 2011年1月9日～2011年1月28日(新規)

研究課題 子ども心理に関する理論及び研究の発展

指導教員 脇中 洋 教授

□特別研究員

* スターリング ジェシカ ダウン (STARLING Jessica Dawn)

研究期間 2011年4月1日～2012年3月31日(延長)

研究課題 出家者の家族:「寺の女性たち」と近現代
浄土真宗における伝統と変化

指導教員 佐賀枝夏文 教授

* 朴 珣英 (PARK Soon Young)

現 職 本学非常勤講師

研究期間 2011年4月1日～2012年3月31日(継続)

研究課題 フレデリック・ダグラス晩年のマスキュ
リニティ言説とアメリカ社会における人
種表象

* 林 佩瑩 (Lin Pei-Ying)

研究期間 2011年4月1日～2012年3月31日(新規)

研究課題 九世紀の禅仏教の再訪:東アジアにおける
現代異文化の視点

指導教員 ロバート F. ローズ 教授

* 武内康則

現 職 京都大学非常勤講師

研究期間 2011年4月1日～2014年3月31日(新規)

研究課題 契丹語資料を用いたモンゴル語史の研究

指導教員 松川 節 教授

* 右田裕規

現 職 任期制助教

研究期間 2011年4月1日～2013年3月31日

研究課題 天皇家の商品化過程にかんする歴史社会
学的研究

* 西尾浩二

現 職 本学非常勤講師

研究期間 2011年4月1日～2013年3月31日

研究課題 プラトンの中期イデア論の生成

* 箕浦尚美

現 職 本学非常勤講師

研究期間 2011年4月1日～2014年3月31日

研究課題 本地物語の研究—菩薩行と誓願を視座と
して—

研 究 所 報 第 58 号

2011年5月1日 発行

編集発行 大谷大学真宗総合研究所

〒603-8143 京都市北区小山上総町

Tel. 075-411-8498 Fax. 075-411-8435